OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	詐術としてのフィクション : デフォーとスモレット
Author(s)	服部, 典之
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/1334
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏名	服部典之（はっとりのりゆき）
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第 17442 号
学位授与年月日	平成15年2月18日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	詐術としてのフィクション——デフォーとスモレット——
論文審査委員	（主査） 教授 玉井 暲 （副査） 教授 森岡 裕一　教授 柏木 隆雄

論文内容の要旨

本論文は、イギリス18世紀の小説家ダニエル・デフォーとトバイアス・スモレットの主要作品を取り上げ、フィクションという概念の変容に注目することにより、英文学における小説の誕生に関わる問題を考察した研究である。「フィクション」が、18世紀初頭では政治的パンフレットの中で論敵を批判する「捏造」という意味合いで使用されていた状況から、虚構という物語を意味する特別な言葉に、概念が発展していった過程とそのありようを明らかにすることによって、今日イギリス18世紀文学研究において脚光を浴びているテーマ「小説起源論」研究に参加しようとしたものである。論文全体は、序章と本論全13章から構成されており、A版で総頁352頁（注、引用文献を含む）、400字詰め原稿用紙に換算しておよそ760枚からなる。

序章では、本論文の概要を説明するに当たり、フィクションの創生にはトリック、レトリック、詐術の三つの基本的なアスペクトが関わっていることを説く。第一部「捏造からフィクションへ」では、主にデフォーの詩作品『生粋のイギリス人』と『ロビンソン・クルーソー』を取り上げ、「フィクション」にポジティヴな価値が付加されるレトリックを跡づける。『生粋のイギリス人』は、「正統なイングランド人」という理念を一見提示しているように見えるが、実は、過去との関係を断ち切り、個人の努力と美徳により自らの功績を獲得することこそ正統性の証しだと主張するテクストであると読み解き、ここにフィクションの創生とイギリス近代国家の成立との間のパラレルな関係を見て取る（第二章）。第三章では、『クルーソー』において、クルーソーがカリブ人の青年フライデーを産出することにより、語り手、読者、他者からなる「仮構のイデオロギー空間」が生まれていることを説く。第四章では、南アフリカ出身の現代作家J.M. クッツェーがデフォーの『クルーソー』『ロクサーナ』を下敷きにして書いた小説『フォー』（1986）を取り上げ、このいわば間テクスト空間においてポストコロニアル時代の「主体」をめぐる深刻な問題が露呈していることを説き、フィクションの起源をめぐる18世紀的問題と今日との間の通底性を見る。

第二部「フィクションのトリック」は、スモレットの三小説を取り上げ、デフォーにも共通する特徴であるピカロ的主人公が果たす機能を考察する。第五章『ロデリック・ランダム』論では、読者を巧みにコントロールし騙そうとする近代的意識の存在を指摘し、第六章の『ファゾム伯爵』論では、「トリック」スター・悪漢としてのファゾムの活動の意味を探り、第七章『ハンフリー・クリンカー』論では、主人公クリンカーが旅の途上で引き起こす数々の混乱がこの小説における物語り空間の成立に不可欠であることを主張し、いずれの作品でも、「トリック」がフィクションの構築に深く関わっていると説く。

第三部「フィクションのレトリック」は、デフォーの三小説を取り上げ、W・ブース『フィクションの修辞学』に

依拠し、「内在する作者」が果たす読者を誘う手法の総体としてのレトリックという観点から作品を分析している。第八章『コンソリデーター』論では、この粗野なフィクションに指摘できる自己参照的レトリックはデフォーの後期作品に繋がる特質だと指摘し、第九章『ペスト』論では、語り手H・Fの果たす二重の語りが、この作品を単なるルポルタージュではなくてフィクションとして成り立たせていると述べ、第十章『ロクサーナ』論では、破綻と見なされる結末の自己参照性にポジティヴな意味を見出し、レトリックがフィクション空間に豊かさを生み出すありようを明かにする。第十一章では、同時代の作家スウィフトの『ガリヴァー旅行記』にも触れ、ガリヴァーの「肉体」の表象に窺われるレトリックの重要な機能に注目している。

第四部「フィクションの詐術」は、トリックがレトリックと繋がり、プロットと絡まりあって、イデオロギー的色彩を帯びたり、ある種のイデオロギーが無意識的に忍び込んでいる可能性のある作品を対象にする。第十二章では、デフォーの『カーネル・ジャック』に指摘される黒人懐柔の物語りを取り上げ、トリックが詐術となり、それが作者のレトリックとなった見事な例として指摘する。第十三章では、スモレットの『クリンカー』を再度取り上げ、宗教メソディズムの描出には上流階級のための願望成就小説が読み取れると論じ、ここに作者の取り込みの詐術が働いていることを指摘する。第十四章では、ヴィクトリア朝後期に刊行が始まった『オックスフォード英語辞典』に採択された『ロビンソン・クルーソー』からの引用例を検討することによって、この *OED* という十九世紀的テクストが孕むイデオロギー性を解き明かしている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、18世紀イギリスの代表的な小説家デフォーとスモレットを中心にして、彼らの十数篇の主要作品を、トリック、レトリック、詐術という三つのアスペクトから具体的に考察することを通して、「捏造（forgery）」をいかに「フィクション化（fictionalizing）」したか、いかに「フィクション化」を果たしているのか、その過程とありようをスリリングに論じた力作である。「フィクション」という概念が、負の価値を持った「捏造」から虚構という物語りを指す正の価値を獲得していく展開が、18世紀初頭の文化・社会・政治的コンテクストとの絡みにおいて力強く論じられている。論者が、このイギリス小説起源論を展開するに当たり、「小説」という言葉を避け、「フィクション」を採ったのは、伝統的なジャンル論にもとづいた小説誕生論がともすればスタティックなフォーマリズムに陥る危険を避けたかったからであり、この意欲的な試みは高く評価されるべきである。本論文のこうした力のこもった面については、従来あまり注目されることのなかったデフォーの『生粋のイギリス人』を取り上げ、そこに見られる「捏造」と「虚構」が複合的に重ね合わさった巧妙なレトリックの意味を粘り強く考察したり、また『クルーソー』を論じるに当たって、このクルーソー物語りの第三部として出版された『クルーソーの真摯な反省』に付された批判反撃のための序文の意味を鋭く分析したり、また現代作家クッツェーの『フォー』に触れることにより論に現代的コンテクストの導入を図ろうとした、それらの新鮮な論考を読めば容易に確認できる。

本論文の特徴のひとつに、イギリス18世紀小説論としての魅力がある。フィクションの成立がその過程とありようの両面から触れられることにより、デフォーとスモレットの小説群が、捏造とフィクションの未分化を残した粗野なありようから、両者の対立・拮抗、フィクション化の達成まで、そのさまざまな段階における状況が広く考察されることとなり、18世紀小説特有の肌理が改めて解き明かされる結果となっている。さらにいえば、フィクション化の段階に多層性が窺われるデフォー小説を扱った論考に論者の力量がより一層発揮されている。

ただし、本論文において問題がないわけではない。序章において提示した原論的な枠組みがその後の各論において必ずしも具体的に論じられていない部分が見られ、また、トリック、詐術などの重要な概念に関わる言葉・用語の使用において時にその輪郭が不鮮明になることがある。また、作品からの引用に和文と英文の併用が見られるなど、論文としての形式的不統一が残っているのも惜しまれる。

しかし、これらの点は本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。